

## ベルギー大使の見た戦前日本

原題：Dix-huit ans d'Ambassade au Japon

副題；バツソンピエール回想録

著者；アルベール・ド・バツソンピエール (Albert de Bassompierre)

訳者；磯見辰典

講談社学術文庫刊

一寸した宝物を拾った感じである。今更、戦前の日本の姿を、その在りようを読んでどうするのかと思う節もあろう。ところがである。

1921年(大正10年)から1939年(昭和14年)まで日本大使として18年間日本に滞在したバツソンピエール大使の私的メモが、日本/ベルギーが国交樹立してから150年の記念として、昨年関係者の執念で出来上がった代物である。

驚くなかれ、戦前の生きいきとした時代の流れが、よく見える記述になっている。

### 1) バツソンピエール回想録とは：－

何と申しても、18年も連続して他国へ大使として赴任し続けた例はあまり聞いたことがない。もちろん“日本好き”は人後に落ちない。赴任中4回休暇で帰任しているが、その都度、往復とも、途中のヨーロッパ、東南アの国々を細かく視察し、グローバルな慧眼を磨きつつ、真剣に日本の分析に余念がないのがよくわかる。又その観察力、表現力には目を見張るものがある。

今日のように写真、映像の進歩した時代では、人間個人の分析力、観察力、表現力は退化していることがこの本を読んでいると良く判る。

外交官としての、見識を磨きながら、当時BARONという立場は、高度の情報網も持ち合わせているとは云え、日本の文化、習慣に深く関わっていて、仕事の遂行に留まらず日本人より意識して、日本の優れた部分を掘り起こした記述になっている。

一例であるが、「源氏物語」について；(P.71 参照)

「これは単に十一世紀のみならず、あらゆる時代を通じて日本文学の金字塔ともいうべき作品である。私の考えでは、いかなる時代、いかなる国の文学に比肩するものも、凌駕するものもない最高の傑作である。一中略一登場人物の性格描写の心理分析が、それがプルーストの作品であるといってもおかしくないほど、見事におこなわれている。」と絶賛している。恐れ入った次第である

### 2) 日本の現代史を描いたバツソンピエールのメモワール

現在の日本の中で昭和史が云々されてきたのは、戦後70年経てきた極めて最近の出来事である。日本が大太平洋戦争敗戦とその戦前の総括を曖昧にしたために、20世紀の冷静な歴史記述が意外と少ないが、バツソンピエール大使在任の18年間は日本の現代史上重要な時期に当たっている。近代化の明治国家から大正へと引き継がれ、致命的な出来事が繰り返され、軍国主義時代に入り込み、諸要人の暗殺、満州事変、5・15、2・26事件、軍部台頭、国際的孤立か、太平洋戦争への暗い流れを、外交官としての立場と日本を好きな個人の立場で冷静に見ている。

その控えめな記述の中にも日本に対し、巨視的な歴史的展望を欠いた国際的視野の狭さがあったことを指摘している。もっとグローバルな知見を持てば、という期待感を漂わせている。有難い外人である。

これを読みながら、日本の戦前を総括するならば、「戦争は絶対に避けるべきものである」という事の絶対感と、日本人の問題点として、大方常識的ながら、しっかりした人生観、世界観に基づく個性の欠如のためか、結局時代環境に流されやすく、時の論理（戦争を是とする）に引きずられ、取返しの利かない結果を齎した。しっかりしたグローバルな知見の欠落を再認識させられたし、それをこの著者は示唆している。

### 3) 印象的な記述

#### ① 逗子で関東大震災に遭遇した記事；(P.81 参照)

地震、津波、火災に身をおかされながら、家族が離散した一週間を綴った臨場感溢れる明細な文章にあまりお目に掛かったことがなかった。

#### ② 2.26 事件の見方；(P.136 参照)

当時著者が親しくし又評価していた、斎藤実大臣、高橋是清大蔵大臣を襲った軍部の熱狂の徒を強烈に非難している。

#### ③ 2.26 事件以降の日本の政治組織の変化 (P.207 参照)

目立たぬように、軍部独裁政権になって行くことを見ている。

### 4) 主な日本印象記の歴史と優れた点

1549 年：聖フランシスコ・ザビエル来日；イエズス会日本通信

1853 年、1854 年、1855 年：ペルリ提督来日；日本遠征記 (1856 年作)

1921 年—1939 年：バツソンピエール日本滞在；回想録 (1945 年作)

1946 年： R.ベネディクト； 菊と刀 (1946 年作)

その他、タウト、シュリーマン、バーナード・リーチ、ビゴーなどがある。

これらは日本に憧れながら、ヨーロッパ、アジア各国の文化、経済を見定めつついずれも国際感覚を持った明細な印象記になっている。

一方、明治になってヨーロッパへ視察に行った進取の気性を持った官僚たちの報告は、先進諸国をただ見るにとどまっている。大方は、長い鎖国とキリシタン禁制の余波もあり、島国の狭隘な視野で国際感覚が乏しく分析力も希薄である。

今日、官僚やマスコミの内向きな性向を見るに、常に世界を広く見る習性に欠けている後遺症が、今尚尾を引いているのではなかろうか。

### 5) ベルギーという国と著者と訳者の深い結びつき

この本は読みやすく、翻訳された痕跡を感じさせない名文になっている。

実は、今回の文庫本として刊行する前に、1971 年に「在日十八年」なる本として原本を一度翻訳したようであるが、既に絶版になっている上、訂正を要する部分もあるようで、読みにくい（講談社談）ので今回手を入れたのが実情のようである。

翻訳者の磯見辰典氏は、西洋史学者で、上智大学で教鞭をとられ、ベルギーに強い関心をもって研鑽され、1989 年に白水社から「日本・ベルギー関係史」という本を出版している。日本好きのバツソンピエールとベルギー好きの磯見辰典の共著の様な具合になっており、今回訳者は遠慮なく、著者が日本語で書いたような本に仕上げている。

磯見氏は、ベルギー王室より、ベルギー・日本交流の多大な貢献により外人の貰う最高の賞のレオポルト 2 世勲章コマンドール賞を受賞している。一方、バツソンピエール大使は定年により 1939 年 2 月に帰国した。長年の功績に、レオポルト勲章大綬章をもって

称えられ、1956年に82歳で亡くなるまで、外交官の鏡として厚遇されたようである。ベルギーという国は、ベルギー王国の立憲君主制国家で、その意味で皇室との関わりもあり、先進的な部分も多く、日銀の見本にこの国立銀行を真似た経緯もあり、小国であるがEUの中心で、特殊性を保っている。現在日本人在住者も多く、文化的かかわりもあってEUのなかでも日本人に好まれている国である。

さて、前述の通り、この本に宝物を拾ったような印象を多少触れておきたい。

1945年の日本は国中焼け野が原であった。当時は、とにかく日本再建が急務であった。早くも、1960年には、高度成長まただ中で、経済大国2位の座をもう走っていた。一方、開戦も敗戦も齎らした、官僚やマスコミも、負け戦のショックに戦前の真相にはほとんど触れぬまま経済大国になってしまった。最近見る昭和史は今からみた過去の景色に過ぎない。この本に見るような当時の冷静な記録には、遺憾ながらあまりお目に掛かれない。

只こんなメモワールが残せたことは、いい時代で（別の意味で時代は良いとは言えないが）外交官という特権と、男爵（ベルギーは今尚階級制度が残っている）という特殊階級の人脈や情報網を持っていたことに依ると思うが、バツソンプイエール大使は職務に忠実であるばかりでなく、その筋の通ったいい人生に賛意を送りたい。

（平成29年3月12日 久津正行）